中国人の日本観

—— 周作人

中國人的日本觀

—— 周作人

蘇　　徳昌*
Su Dechang

要旨

周作人はその兄魯迅と並び、中国の新文学史・新文化運動史に最も輝かしい功績を残した文学者・思想家である。彼は若き頃日本に5年留学し、その後も生涯に亘って日本と係わり合い、関心と興味を持った。

彼は日本の衣食住生活に愛着し、日本人は清廉質朴で、自然や自然美を愛することを痛感する。文学芸術は文化の最高表現ではあるけれども、国民性は大多数の庶民の生活文化或いは民俗を見て始めて分かると判断し、祭礼・落語・川柳・狂言・俳諧・浮世絵及び日本語への体験と研究に没頭する。そして、日本人は宗教心に富み、諧謔気味、ユーモアな性格の持ち主であると同時に、心の奥底に悲しみと哀れみが潜んでいることを突き止め、それはアジアに共通する東洋人の悲哀というものであると結論する。

時恰も日中両国の関係が悪化する最中であるが、彼は、それは日本の軍閥政府の仕業で、侵略であると指摘しながらも戦争に協力するはめに陥り、中国で「漢奸」のレッテルを貼られてしまう。それでも、彼は日本文化の研究を続け、「忠君愛国」の実相、武士の情に表れる人情味、裸体趣味の実質、英雄と賢哲の対立等を考察し、軍国日本は大化改新、明治維新への反動であるとする。

日本文化と中国文化の関係は古代ローマとギリシャの関係に似ており、日本は独特の文化を創り出しただけでなく、中国を遥かに追い越している。中国は古代研究のためにも、新社会創造のためにも日本に学ぶべきと提唱する。

平成14年10月8日原稿受理、教養部

Ⅰ．はじめに

私は杜の都と言われる仙台で育った。生まれこそ中国の杭州であるが、生後３ヶ月足らずして両親に連れられて日本に来、外祖母の元に預けられた。兄弟が多すぎて、母の手に負えないということで、兄の時から最初の２、３年は母の実家で外祖母が育てることになっていた。ところが、運悪く、ようやく帰国しようとしたその矢先に支那事変が勃発し、両親のところに帰れなくなってしまった。以来13年、幼稚園から小学校、中学校と、仙台で大きくなった。日中戦争の最悪の環境の中で、外祖母は周りの人たちの勧めるのを頑として聞かず、一目見れば敵国中国人とすぐ分かる「蘇」姓を外祖母の「松本」姓に変えなかった。それでも、同級生から一度たりとも「ちゃんころ」などと呼ばれたことはなかったし、私がいた仙台市停車場の近くにある荒町小学校では私を何年も級長にし、卒業する時は校庭で、全校生徒を前にして、校長先生が自ら表彰状を渡してくれた程である。これが悪に染まらぬ荒町の町民、仙台の市民、東北の人間、日本人の本来の姿なのである。

たとえ戦時中でも始めは暮らしはそれ程悪くなかったが、召集で２番目の叔父が台湾に行き、３番目の叔父が朝鮮に行ってしまい、家に残るのは年老いた外祖母と目が不自由な一番上の叔父とまだ子供の私の３人というふうに、この世の中では最も弱い者同士の家族構成になってしまってからはだんだんと苦しくなってきた。隣近所の人たちが大変優しく、何やかやと面倒を見てくれた。外祖母は縫い物等をして生計を立てていたようである。ほの暗い裸電球の下で、老眼鏡をかけて、着物を一針一針縫っていく外祖母の側で、私はよく一人静かに遊んだものである。叔父が家の庭に鶏や兎、モルモットをいっぱい飼っていたので、私は毎日放課後に叔父の手を曳いては近くの毘沙門天の裏にある墓地へ飼料とする草を取りに行った。友達が三日に上げず一緒に行き、叔父がしゃがんで鎌で草を取っている間、飯事等をして遊んでくれた。日が暮れそうになると、私は草をぎゅうぎゅう詰め込んだ大きな麻袋を肩に担いでいる叔父の着物の袖を引っ張って連れて帰った。いつの間にか、私は町内で孝行息子という噂を立てられるようになった。その叔父が又私を非常に可愛がってくれ、毎日のように肩車に乗せてくれたのを覚えている。戦争が終わりに近付くにつれて、状況は一変した。まさか塗炭の苦しみを味わうとは夢にも思わなかった。何回かの疎開、Ｂ29の大規模な空爆、仙台中心地の焼け野原化、極端な食糧不足、そして、遂に私の母や兄も同然の外祖母と叔父が飢え死にに近い状態であの世へ逝ってしまい、私は親戚の間を転々とさせられた。このような家庭環境が私の体に慈悲・慈愛・憐憫・同情・寂寞・孤独・感傷・失望という信念や感情を受け入れやすい素地を作ったのである。そして、形や中身は種々様々であっても、これらはどうも日本人共通のもののようである。

私は言うまでもなく日本語で育ち、帰国してから中国語を習った訳であるが、同じ漢字を使うと言っても、片方は漢字仮名交じり文、ましてや子供であるから、仮名の方が断然多い。それに対して、片方は全部漢字と来ている。それで、文字数が同じである場合、中国語の方が日本語より意味或いは情報の量が遥かに多い。それもあってか、中国語の表現は簡潔・理性的・

概念的・抽象的・正確であるのに対して、日本語は詳細・感情的・情緒的・具象的・曖昧である。中国語によるコミュニケーション・意思疎通は言葉そのもので十分目的を達することができるが、日本語は言葉だけでは足りず、言語の背景にある文化、日本人の性格、人間関係の特徴、表情・手振り・身振りの意味するものを知らないと、完全には理解も表現もできない。言葉一つとっても、日本語は言外の意味が非常に多い。総じて言えば、中国語は男性的・ハードで、日本語は女性的・ソフトである。言語はそれを使用する人間の思想や感情の現われであるが、その逆の人間に与える影響も絶大である。言葉が人を創ると言っても決して過言ではない。私は完全に中国語で生活を営むようになってからも、慣れないものが二つある。一つは、人の名前の呼び捨てである。たとえ教え子でも、日本語なら「君」或いは「さん」くらいは付ける。中国語にそれに相当する言葉がないので、今現在に至っても、「某同志」と言っては、人に笑われる。もう一つは敬語である。上海で何時か第一デパートに買物に行き、「請給我看看這個好嗎 ?」と若い女子店員に話したら、「お客さん、言葉遣い丁寧ですね。日本人でしょう。」と言われたことがある。

私は妻まで日本の女性を選んだ。中国の女性は自己主張が多く、それを言葉同様にはっきりと単刀直入に言う。それがきつく感じるのである。日本の女性は言葉少なに先ず優しく受け入れ、大きく包んでくれる。最後は感化させられてしまい、虜になるのは中国の場合と同じであるかもしれないが、気持ちいいのである。

節の付いた言葉、つまり歌は最も著しく人の心を現わしている。日本人なら誰でも歌える「夕焼け小やけ」、「七つの子」、「さくら」、「宵待草」、「影を慕いて」等の、明るくて、センチメンタルな、剛情なのに、どこかに哀愁を帯びている、繊細且つ素朴で自然な歌詞やメロディーは日本人という人種・民族・国民を余すところなく表現している。私は日本の大学教授や研究所の研究者と数えきれないほど一緒に酒を飲んだことがあるが、酔いがまわってきて唄い出す、小節のきいた「勘太郎月夜唄」、「昭和枯れすすき」、「船頭小唄」等の演歌を傍で耳にして、本当にこれは日本人の心の叫びという気がしてならない。そして、歌声だけでなく、その表情も物腰も、明治維新以降身に付いたヨーロッパ文明の紳士的な、或いは終戦後アメリカンナイズされたインテリ臭さは跡形もなく消え去り、従来の生々しい日本人の姿丸出しになる。雨・涙・酒・女のような言葉が必ず出てくるが、くだらない、俗っぽい、下品だと言って、一蹴することはできない。私は又幼い時に聞かされもし、唄った軍歌、例えば「異国の丘」や「同期の桜」をよく唄う。勿論戦争、そして、その戦争に狩り出されて行った二人の叔父を思い浮べながらである。この軍歌の、校歌に似ている、強い意志と悲壮な心情を現わすメロディーと行進曲のリズム感が私は大好きで、それも原因してか、理性的には日中戦争の評価には否定的であっても、中国人と同じように日本人を軽々しく「東洋佬」、「日本鬼子」とは呼べないのである。事実、日本の軍国主義復活反対という政治運動の中でも、そういう言い方はしたことがなかったし、毎年のように日中の間で火花を散らす歴史教科書や靖国神社問題にしても、遺族を含む日本人の気持ちが分かり、そう躍起に反対はしない。

帰国してからちょうど30年目に、私は日中国交正常化後第一号の交換教授として、日本学術

振興会の招へいで日本に再び来た。感無量であったのは言うまでもないが、私が一番懐かしく思ったのは食事で、生卵、納豆、とろろ芋をかけた炊きたての朝ご飯と豆腐、大根を具にした味噌汁を口にした時は、世界でこれより旨いものはないと思ったし、鰹節、昆布等を煮出した汁で付けた風味はこの世で最高のものだと感じた。幼少の頃覚えた味は終生忘れない。舌の記憶力は頭よりずっといい。中国人は生や冷たいものをあまり食べないし、特に冷たいご飯は絶対に嫌がる。中国人は料理というものは必ず炒めるか、煮るか、焼くか、蒸すかをし、色々味付けをして始めて料理と言えると考えているのに対して、日本人はなるべく材料の本来の味を生かすという発想である。食生活に於いても、日本人は自然のままを重んじる。そして、食べる前に、両手を合わせて、「いただきます！」と大きな声を出して言い、食べ終わった後は、頭を少し下げながら、「ご馳走様でした。」と言って神様に感謝する習慣は大変素晴らしい。

住生活で、私が中国でなかなか馴染めなかったのが土足で家の中まで入って行くということである。でも、さすがにベッドに腰掛けて靴を脱ぎ、そのまま布団にもぐるのではなく、足を洗ってから寝る。毎晩寝る前に小さめのたらいで足を洗う。これが中国人の習慣である。「水滸伝」にも足を洗うシーンが出て来るから、少なくても千年もの昔から既にこういう習わしだったのである。日本人は毎晩のように風呂に入る。家に風呂がない場合は銭湯に行く。そして、お湯に浸かる。これ又、日本人独特のものである。体をきれいに洗うだけでなく、疲れも取ってしまう。これと関連して、日本人の温泉好きも世界で類を見ない。とにかく日本人は綺麗好きである。畳の生活はこの上になく快適で、足の裏で感じる畳の肌触の気持ちのよさはなんとも言えない。夜寝る時に床を敷き、朝は布団をあげる。清潔だけでなく、気分転換にもなる。一つの部屋が寝室になったり、居間、客間、勉強部屋になったり、様変わりする訳である。木造の家屋もとても開放的で、私の家の隣の子など放課後勝手に縁側から上がって来て、私と一緒に炬燵に潜り込んでは俯せに寝そべりながら田河水泡の「のらくろ」の漫画本を読んだ。夜こそ雨戸や玄関、勝手口の戸をきちんと閉めるが、昼間は開けっぱなしである。家の中も、障子や襖を開ければものすごく広くなるし、部屋の一角に屏風を立てれば小部屋もできる。叔母などお産をそのような小部屋でし、元気いっぱいの赤ちゃんの上げた産声が家中に響きわたったのをこの耳が今でも覚えている。ヨーロッパに比べて、日本の家は兎小屋に過ぎないなどと日本の一部の西洋かぶれの学者が言うが、あまりにも自分自身を卑しく見過ぎていやしまいか。格子窓の付いた木造建ての家が立ち並ぶと、不思議な日本情緒の雰囲気を醸し出す。私はその空気を吸って育ったせいか、大人になってからも京都や奈良の古い町、金沢の昔の遊廓・武家屋敷辺りを歩くと、心が和む。

子供の遊びも実に豊富多彩である。隠くれん坊・ちゃんばらごっこ・凧上げ・めんこ・ビー玉・剣玉・独楽回し・縄跳び・草野球等、色々あるが、隣近所の子供たちが同級生に限らず、外で一緒に遊ぶ。健康的で、集団性の訓練にもなる。私は紙芝居も好きだったし、3、4日置きに来る紙芝居の自転車を大勢で囲みながら見た。でも、一番夢中になったのが毘沙門天のお祭りで、その時は朝から晩まで入り浸りだった。日本人はお祭りが好きである。真夏日の盆踊り大会には喜んで出るし、浴衣を着、下駄を履き、団扇を扇ぎながら夜店を見て回るのも一興

である。中には踊りの輪に飛び込んで踊り出す人も多々いる。儒教で何千年もの間、手足を縛られ、唄や踊りを忘れてしまった中国人と違い、日本人は歌唱や舞踊が好きである。私が現在住んでいる堺では、毎年10月に布団太鼓をやるが、何十人かで神輿を担いで練り歩いては止まり、雷のように大きな掛け声を掛けて一斉に両手を上に伸ばし、重たい神輿を頭上まで挙げる。その力強さ・気迫・連帯感には圧倒させられる。中国では絶対に見られない光景である。日本人の連帯意識はこのようにして子供の時から遊びやお祭り等を通して鍛え上げられて行くのである。

日本人の衣生活も実に多種多様である。何一つ抵抗なく、日本料理・西洋料理・中華料理を食べるのと同じように、洋服・着物を着こなすし、それ相応の履物を履きこなす。又頻繁に外出着と普段着を着替える。一見面倒だろうなあと思うかもしれないけれど、実際は逆で、気分転換になっており、エンジョイしているみたいである。特に、着物を着て畳の上に坐ると安らぐ。結婚式も神前結婚・教会結婚・仏前結婚・人前結婚と4種類あり、服装・衣裳もそれぞれ違う。東洋と西洋、仏教とキリスト教等異質の文化や伝統的とモダンなものとが共存できる、非常に自由で、寛容的な環境・雰囲気にある。それに私が感心しているのは「紅白喜事」、冠婚葬祭の服装で、どちらも黒の礼服に、白のワイシャツで、「紅」の慶事、結婚式・披露宴の時は白、「白」の凶事、葬式の時は黒と、ネクタイを取り替えるだけで済み、とても合理的にもできている。

日本観とは言うまでもなく、日本・日本人をどう見るかということであるが、その性質なり、他の国・国民との関係なりを見る場合、二つのことを考える必要があろう。一つは、日本の政治・経済・社会・文化、とりわけ哲学・宗教・芸術・文学及び日本人の国民性・価値観の中で、基礎・基本になるのは衣食住の生活と言語であるということ。一つは認識・認知のプロセスである。感覚から理解、理解から一段と深い感覚、理解と、螺旋階段のように高まって行く。その出発点と一段一段の始点になるのが、感覚である。大脳の活動を通じての理解の先に、目・鼻・耳・舌・皮膚等による視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚、或いは第六感が欠かせないということである。

日本研究・日本論で有名なフランスの海軍大佐Ｐ・ロチ、小説家Ｊ・ゴンクール、イギリスの言語学者Ｂ・Ｈ・チェンバレン、新聞記者Ｌ・ハーン、アメリカの動物学者Ｅ・Ｓ・モース、東洋美術史家Ｅ・Ｆ・フェノロサ、文化人類学者Ｒ・ベネディクト、ドイツの医師Ｐ・Ｆ・シーボルト、建築家Ｂ・タウト、ポルトガルの日本研究家Ｗ・モラエス等の著書[1]を読めば、この二つのことを踏まえていることがよく分かる。みな直接的な体験に基づいている。Ｒ・ベネディクトだけは日本に来たことがないので、間接的な体験になるが、それでも厖大な文献を調べ、数多くの日本人に会っている。

「ある国民の生活の、極度に人間的な日常茶飯事に注意してこそはじめて、いかなる未開部族においても、またいかなる文明の先端をゆく国民においても、人間の行動というものは日常生活のなかで学習されるものであるという、人類学者の前提の重要な意義を、十分に理解することができるからである。その行為や意見がどんなにふう変りなものであっても、ある人間の

感じかた、考えかたは彼の経験となんらかの関係をもっている。」[2)]

私は自分自身の原風景・原体験を含めた体験を垣間見てみて、R・ベネディクトのこの論断の意味を実感し、又それに啓発されて、数奇の運命を辿り、波瀾万丈の一生を送った周作人の日本観を見てみるつもりである。

Ⅱ．日本の衣食住

1．留学の姿勢

1906年秋、22歳の時、周作人は日本に留学に行くが、最初に住み着いたのは魯迅が既に住んでいる、東京本郷湯島2丁目にある伏見館であった。[3)] そこから留学先の法政大学の予科に通った。1907年春、東竹町にある中越館に引っ越す。1908年4月、本郷西片町10番地呂字7号に移り、「伍舎」という名前を付け、中国人留学生5人で住む。秋に立教大学に入り、古代ギリシャ語を習う。1909年1月の末頃に、近くの西片町10番地丙字19号に居を移す。夏に羽太信子と結婚し、日本語の勉強を又始める。1910年12月、麻布区森元町に引っ越し、翌年の1911年秋に妻を連れて帰国する。合計5年間日本にいた。

周作人が「留学の思い出」[4)] で書いているように、日本の明治維新と日露戦争から大きな影響を受け、「熱烈な興亜の意気に燃えていた」彼は、「日本へやって来て少しばかり技術をおぼえて帰っても結局は上っ面をなでたにすぎず、生活から体験してかからぬ限り日本のことは深くわかるまい、とそう思っていたから」、「衣食住ともにまったく日本式の生活を送っていた。」

ところが、大半の留学生は昔だけでなく、今でも、日本をヨーロッパ文明やアメリカ文化を習う窓口・通り道・手段としか考えておらず、日本人と同じような生活をし、日本に学ぼうとはしない。特に中国人留学生は他の国の留学生よりも自分の殻に閉じこもり、自身の習慣に固執する。自炊する人が結構多い。それは経済的な理由によるというよりも、中華料理の炒め物とか温かいご飯が食べたいからである。勉強も椅子でないといけないし、坐って炬燵に入って読書したり、論文を書いたりなんてする人は皆無に近い。どこへ行っても、中国人同士で固まり、中国語、甚だしいことに至っては故郷の方言で会話する。

このような留学生はそれでもまだいい方である。日本に来て何を習うにしろ、とにかく何かを習おうとするからである。多くは名ばかりの留学で、実際は金儲けに来る紛いの留学生である。聞いた話であるが、某短期大学が中国から、留学生を200名受け入れたところ、来たらすぐ大学当局にアルバイトを紹介しろと騒ぎ出し、まだ1学期も終わらぬうちになんと一人残らず東京の方に出稼ぎに行ってしまったとかという話しである。コンテナ等に隠れて船で密入国する者となると、なお始末に負えない。日本人残留孤児の親族と偽ったり、偽装結婚やパスポートを偽造したりして入国する者も少なくないし、入国してからの中国人仲間同士の喧嘩、強請・強盗・殺人・麻薬大量持ち込み等の犯罪事件も後を絶たない。日本の下宿屋の半分近くが外国人に家を貸したがらないのも無理はない。経済合作協力、輸出入貿易、人的往来が鰻登りの如く増長している中で、日本人の中国人に対する国民感情がよくならないどころか、嫌悪感

さえ募ってきているのが現状である。

2．衣食住生活への愛着

周作人は東京を第二の故郷と見、「日本管窺の二――日本の衣食住」[5]で詳しく日本の衣食住生活に対する見方を述べている。

衣食住は生活の一番重要な部分で、その生活に慣れてくると、愛着が生じ、人間の生理的・心理的欲望と生活とが一体化し、その生活から離れられなくなる。それぞれの人種・民族・国民は何百年、何千年に亘って自分に適した生活様式を作り出し、又その生活様式によって人種・民族・国民が創り出されている。

日本の家屋の特徴は木造建てが主で、天井や柱はみな木で、彫り物をせず、漆もあまり塗らず、自然のままである。日本人は木の香りが好きである。玄関・勝手口も広い縁側も昼間は開放されている。屋内の各部屋は襖や障子で隔てられ、鍵をかけない。そして、中国や他の国と全然違うのが玄関で靴を脱いで上がるということである。廊下や台所は板間になっているが、その他はほとんど床に畳が敷き詰められ、座敷になっている。椅子に腰掛けるのではなく、畳に坐る。寝る場合も畳の上に床を敷いて寝、起きたら又押入にしまい込む。壁に床の間・戸棚・押入が備え付けられており、客間に大きな長方形のテーブルが置いてあり、居間に火鉢がある以外は何もなく、面積がそう広くなくても、広々と感じるし、天井もそう高くないのに、坐るので低く感じない。風通しがよく、清潔である。留学生は大抵一間であるが、居間・勉強部屋・客間・寝間兼用である。このような日本式の家屋を周作人は好きこのんだ。坐るのには慣れなかったようであるが、家屋の質素さ、部屋の一石何鳥かの効能が彼の格別あっさりした生活に向いていたし、「一種せいせいした心地よさ」まで与えてくれたからである。もちろん欠点がない訳ではない。夏向きで、冬向きでなく、夏は涼しいが、冬は寒い。燃え易く、少し不用心でもある。

彼は旅行をし、旅館に泊まった時のことを、次のように書き、日本式の住生活を絶賛している。

「宿屋の飾り気のない一室で窓にもたれて山を眺め、浴衣がけで畳に寝そべったまま茶を一杯所望して啜る、これはかつて泊まった洋式のや中国式のどんな旅館よりもくつろげるし、手軽でしかも安上がりというものであった。」

衣生活は住生活と表裏一体の関係にあり、着物は日本式の家屋に合致している。着物の色彩や模様は日本の四季折々の自然を取り入れ、非常に美しいオペラ「蝶々夫人」が長年に亘って人気が衰えないのは夫人の服装が着物であることと関係があると周作人は見ている。着物は日本の「家屋にとって立ち居に最も便利」で、「和服で洋室に暮らすとか、中華服で日本間に暮らすとかしてみても、具合はよろしくなかろう」。彼は日本の履き物下駄も好きで、1934年の夏、東京へ旅行に行った時のことを振り返り、次のように言っている。

「夕方、和服下駄穿きにステッキといういでたちで帝国大学の前のあたりを、古本屋だの屋台だのをのぞきがてら散歩してみたが、実に気さくなものである。」

食生活と言えば、先ず食べ物であるが、野菜と魚介が中心で、鶏や豚肉・牛肉は少ないし、マトンは食べない。魚も生のまま食べるのが好きで、刺身が嫌いな人は極稀である。主食は米のご飯が多く、うどんや蕎麦も一日に一食くらいは食べる。但し、産婦、病人を除いて、お粥は食べない。次に、天ぷらのように油で揚げて食べる場合もあるが、主に煮たり、焼いたりして食べ、炒め物は少なく、油気がない。調味料や出し汁は使うが、材料本来の味をフルに活かし、香辛料はほとんど使わない。要するに、清淡質素である。そして、冷たいものを平気で食べる。ご飯まで、おにぎりだけでなく、寿司もみな冷たい。中国人にはなかなかできない真似である。谷崎潤一郎は東京の食べ物を粗野・貧弱・殺風景とこき下ろしたが、周作人は故郷越の人の食べ物に喩えて、「そのうまさもまた他ならぬ貧乏臭さ、すなわち清淡質素の中にあるので、しいて申さば俳味ということになろうか」と逆に弁解している。彼は日本の食べ物は「平気だった。というより、それなりに別種の風趣さえ感じ」、中日間の食べ物の文化交流まで考えては、「食気の上に思索をも誘われた」ようである。

20世紀に於いて、周作人ほど日本の衣食住生活を身を以て体験し、愛着を持つようになった中国人はいないであろう。彼はそれだけでなく、生活中の習俗まで好きになるのである。彼が「東京を懐う」[6] で言う、「例えば清潔なこと、礼儀正しいこと、洒脱なこと」である。

3．性分と思古

周作人は1885年１月16日、浙江省紹興府会稽県東昌坊口新台門で没落した地主の家に生まれた。祖父は科挙贈収賄が露顕し投獄され、不遇の父も早くなくなり、一家は困窮のどん底に陥った。そのような環境で育ったので、暮らしは楽でなかった。紹興と言えば水郷であるが、結構厳しい土地柄で、一般の人たちは一日３食の飯にありつくのが精一杯で、食べるものと言ったら、塩漬けの魚や菜っぱ、醗酵豆腐、タニシぱかりで、塩気、臭味に慣れていたし、油気などほとんどなかった。冬は冬で北風が吹きまくり、家の中にも火気がないので寒い。紹興の人たちはこの貧しさに安んじ、粗衣粗食で年がら年中働いているのである。彼が東京での下宿生活をなんとも思わなかったその一つの原因はここにある。それに彼は性格的にもあまりくよくよしない方なので、逆に日本の食べ物が故郷や中国のどこそこの何に似ているとかということを考えては楽しむことができたのである。

正に彼自身が「東京を懐う」で言っているように、「私は日本生活から自分の性分にしっくり来るものを見つけ出したまでであって、それ以前の経験の中でまともに親しめたものがあればそれに近似しかつ一層味わいの深いものを取るし、さきほどの纏足のように、嫌悪が反面にあれば、それと相反するものを取って代償にし」たのである。

もう一つの原因が思古の幽情である。周作人は民族革命の信徒であり、自ずと復古の思想の持ち主であって、清以前乃至元以前のものであれば何でも素晴らしく思え、日本で古風の唐時代の名残を発見しては懐かしく感じたのであった。衣食住生活にも生活の習俗にもその面影が相当見られたし、言葉や文句、字体、名称にもたくさん残っていた。清国留学生と呼ばれるのを嫌い、手紙を出す時は必ず支那と書いた。現在は言うまでもなく、当時も問題になっていた

「支那」という言い方に対して、彼は「何の反感も絡んではいなかった」。むしろ「摩訶脂那、至那さらには支那などは、いずれも印度の中国に対する美称だと承知していた」。

周作人がこよなく日本の衣食住生活を愛し、「遠遊不思郷、久客恋異郷」の心境まで行ったのは単純な懐古とか郷愁、ノスタルジアだけではなく、もっと奥行きの深い民族主義・民主主義の思想によるものでもあるが、その前段階として、先ず直感・直覚で東京での生活が好きになったのは事実である。

Ⅲ．日常生活文化

1．縁日・祭り

日本は神社寺院が多い。私みたいな外国の人間でさえ行ったことがある神社寺院と言えば、伊勢神宮・東照宮・明治神宮・熱田神宮・平安神宮・春日大社・出雲大社・厳島神社・靖国神社、東大寺・法隆寺・唐招提寺・薬師寺・延暦寺・金閣寺・銀閣寺・金剛峰寺等ときりがない。今回は12回目の訪日になるが、学術・教育交流に来たのではなく、まるで宮参り・寺参り、参詣に来たみたいである。どの町や村へ行っても、賑やかな大通りや寂しい裏通りにも必ず大小様々な神社やお寺がある。デパート・スーパーより多いと言っても決して過言ではない。神様や仏様は家の中まで入って来ている。ほとんどの家庭に神棚や仏壇がある。日本の家屋には客間・居間等と並んで歴とした仏間がある。因みに、私は刺身は全体から言うと、好きではないが、いなり寿司だけは大好物で、しょっちゅう口にしている。そして、口にする度に伏見稲荷大社に行った時のことを思い出す。日本人で神社仏閣と関わりがない人はいないであろう。冠婚葬祭を始め、正月行事・盆行事を中核とする年中行事、みなそれと関係がある。日本の歴史を繙いても、伊弉諾尊・伊弉冉尊の国産み・神産み、天照大神の命による天孫降臨を皮切りに、飛鳥時代の蘇我・物部の戦いから江戸時代の神仏習合、明治時代の神仏分離・廃仏毀釈と、歳月は恰も神道仏教を中心に流れて来た感がする。

周作人は日常生活の一部となっている縁日に注目した。30年経っても、若い頃、近くにある薬師如来の縁日のことを覚えていた。北京にも縁日に似た廟会というものがあるが、ただやる場所が寺院であるだけで、性質は全くの定期的な市であって、昼間しかやらない。縁日のように宗教行事であり、なお且つ夜になる程賑わうというのとは全然違う。彼は言う。[7]

「一国民の、それもとくに外国の文化を理解するのに、単にうわべを眺めるだけでは駄目だと思う。その感情生活に着目し、自然と人生に対する態度の幾分かを理解することができてはじめて、少しでもわかったといえるのである。私はかつてつねに文学芸術というものを通して一国の文化のあらましを垣間見ようとつとめたのであった。結果は何も得るところなく、徒労に終った。その後気づいて、実に愚かであったと繰返し悔やんではみるが、時すでに遅い。もし捲土重来を期するなら、民俗学から入ってゆくほかないのであった。古今の文学芸術の精華は、結局のところ限られた時代の限られた人々の表現にすぎないので、それと現実とを突き合わせてみても、往々にして何事もはっきりしては来ぬばかりか、とんだ見込違いさえしかねぬ。

もしも礼儀風俗を中心に据えてその自然ならびに人生観を探り、さらに進んで宗教情緒を理解するところまでゆけば、ようやく六七分の目鼻はついたことになり、その国の事情を納得しうる希望が出てこよう。」

周作人は「祭礼について」という論文[8]で、日本と中国の祭りの相違点を詳細に論じている。第一に、日本の仏教には仏像があるが、神道にはない。但し、神霊がのりうつる山や滝、鏡、剣、勾玉等の神体がある。中国の宗教には人間の形をしている像がある。日本では神を祭る時、木を立てて、神の憑依降臨に供するが、中国ではしない。第二に、日本の宗教は神と人との接近を求め、霊気が憑依し、神憑り、神人和融の状態に至るのに対して、中国ではなるべく鬼神を遠ざけるか少なくとも敬して親しまない。つまり「礼に余って情に欠ける」という態度である。そして、大事なのが日本では死者のことを仏と言い、死後何年かすると神に祭られるが、中国の死者は罪囚として引ったてられて行く。死後の生活はまことに暗澹としている。杭州の西湖の畔に岳王廟があり、その片隅の日陰になっているところに醜い顔をした南宋の宰相秦桧の小さな石像があるが、観光客はその前を通る度に石像に向かって唾を吐きかける。憎しみと軽蔑の眼差しをしながらである。首相の終戦記念日での靖国神社参拝で、中国は必ずいちゃもんをつけるが、「なにも死んでからまで戦犯扱いしなくてもいいではないか」という日本側の言い分に耳を傾け、日本人の死生観を理解し、尊重するという気持はかけらもない。

日本の御神輿担ぎには誰でも胸を打たれる。周作人は柳田国男の「祭礼と世間」の中から次の件を引用して、理性を超えた宗教的情緒が日本で特に旺盛であることを指摘している。

「路の辻まで行列は来て居りながら、何時になつても神輿が見えず、見えたと思つてからも、右へ左へ傾きかゝり、之を舁く若い衆の素足がYになり、Xになり、又Wの字に成り、『さす』と称して屡々手の挙る限り、高く輿を突き揚げることがある。」

中国人は現世的で、神仏になろうというような大それた考えは持っていないし、神を人とは対象が異なるだけとしか思っていない。宗教行事の目的は福を求めるか、禍を免れるかのいずれかに過ぎない。病苦や危急の際でもなければ祈りもしない。「論語」の言う「子、怪、力、乱、神を語らず。」[9]もそれを物語っている。

要するに、「日本国民は宗教心に富み、祭礼は宗教儀式そのものだ。だが中国人は現世主義者であって、神もこの世の人生のために存在し、かつ両者の間には超えがたい塹壕がよこたわっている。」[10]

「日本の上層の思想界は中国の儒教とインドの仏教を受容し、近くは西洋の科学をもつけ加えられたが、民族の根本信仰はいぜんとして南洋から来たらしい神道教であって、これがひきつづき国民の思想感情を支配し、少数の賢哲が時に離脱したりあるいは多少醇化することはありえようけれど、一寸でも動かすことはできない。そして有事の際に事態をひきずって行くのは、やはりかの神憑りした英雄たちであり、演じられるのは例の一連の芸当だ。」[11]

2．落語・滑稽本・川柳

落語・講談・漫才・浪曲等の大衆演芸、浮世草子・滑稽本・川柳等の庶民文学に関心と興味

を持った中国人は数少ない。黄遵憲の他に周作人くらいであろう。彼は近くにある鈴木亭という寄席に落語を聞きに行ったことがある。又30年経ってから、色々と調べ、「日本の落語」[12] という随筆を書いている。落語家は「扇子を手に泣き笑い、歌い酔い、手を拡げ流し目を使い、いざり腰をくねり、女子の様をなし、百姓の口調を真似、声色と身振りをふんだんに繰出して世態人情の機微を穿ってみせる。その歇語が人を笑い転げさせずにはおかぬ。」彼は柳家（金語楼）小さんが高座に上がり、講じた『論語』等を聴衆が見て笑いこらえきれなくなっている場面に出会っている。そして、落語家がはなしの中に時代の風俗を取り入れ、奇想天外の台詞や仕草で聴衆を笑わせることに感激したみたいである。

中国には真面目くさった説書（講釈）かふざけた相声（漫才）しかない。文学や美術には滑稽の要素があまりにも乏しい。日本の鳥羽僧正の鳥獣戯画のようなものもないし、日本近世の滑稽諧謔を旨とする滑稽本である十返舎一九の『東海道中膝栗毛』や式亭三馬の『浮世風呂』、滝亭鯉丈の『花暦八笑人』のようなものもない。中国人には滑稽さ、諧謔、ユーモア感が全然足りない。犯しがたい、傲岸なさまをしてこそ聖人君子なのである。正に、「これは不健全さの一種の徴候」、いいかえれば「道学と八股が人心を把えおおせた証拠なのであ」り、「旧い勢力はなお強大である。」

周作人の考えはこうである。健全な人間とは豊かな個性と自由な感情の持ち主でなければならない。ところが、中国では儒教や科挙が何百年、何千年に亘って、人々を雁字搦めにし、個性を扼殺し、感情を抹殺してきた。その結果、中国人は石みたいな没個性、無表情の人間に化してしまった。それに対して、日本文化にはまだ諧謔というものが残っており、日本人から笑いは失われていない。文化の他のジャンルを見ても同じような結論が出せる。

事実、彼は「日本の落語」を書く13年前に、既に「日本的諷刺詩」[13] という文章を書いている。世相・世態・風俗の欠陥や人間・人情・人生の弱点を端的にとらえ、機知に富む、奇警の言葉で諷刺する。そして、軽妙・洒脱・滑稽な味を出す。まるで針でちくりと刺され、「痛！」と叫ぶ、或いは芥子を付け過ぎて、涙がどっと出るという感じを読む人に与える。川柳が人情の機微を穿つのに悪意はなく、人はそこに描き出された世相を読み、思わず微笑み、或いは人情にこのような弱点があるからこそ逆に人間が可愛く見えると思うようになる。要するに、川柳の諷刺は世間の一切の形式を無視する、一種の楽天家的なものであって、厭世的に悪態をついているのではない。

日本も昔は中国の悪習に染まって、「経・史・子・集」の４種類しか文学と見ない時代があったが、後に小説・戯曲も認めるようになった。但し、同じ文学でも優劣のランク付けをし、俳句を優・高・上にし、川柳を劣・低・下にした。確かに従来の雅俗の見方からすれば、川柳の言葉遣いはあまりにも俗っぽ過ぎ、上品で美しい文学とは言えない。然し、これは川柳の欠点ではない。世相人情に対して、心のこだわりのない、率直な姿勢の現れであり、むしろ美点である。もしも川柳の欠点を挙げるのであれば、一つは教訓や罵倒が多すぎるのと、もう一つは政治的圧力に封ぜられ、批判的精神を失い、溌剌としたエネルギーを失ってしまったことである。明治維新以降、川柳は益々盛んになるが、儒教の専制的で保守的な立場から新しいものに

反対し、且つ又軍国主義の毒に犯され、敬神愛国の方に傾いてしまった。

3．狂言・俳諧

狂言は中世の庶民の喜劇で、日常的な出来事を笑いを通して表現する言わば人間喜劇、笑いの芸能である。能楽には悲劇がほとんどであるのに対して、その間にちょっと演じられる狂言は軽妙・洒脱・諧謔の内容のものが多い。そして、それが狂言独自のユーモアの表出によって人間の普遍的、本質的な性格や行動が力強く、鮮明に表現されている。周作人は幼少の時、紹興でよく目連戯という芝居を見に行ったので、親近感を感じたに違いない。彼は狂言の世相・人事風刺の笑いに興味を持ち、大名を通して、いつの時代にもいる尊大ぶる人物、僧侶を通して、無学なくせに学問知識をひけらしたがる人、或いは太郎冠者を見ながら感じる、人間の横着と小心、狡猾と実直のような矛盾した心理を笑うその笑いの奥底に潜んでいる庶民の価値観、美意識に注目した。それこそ日本人の心の現われであると感じた。その笑いも又中国人の下品で、卑俗な笑いと違い、実に明るくからっとしていて、純朴、淡泊である。このような日本人の健全さを彼は高く評価した。

周作人が陶酔する心境の一つに「俳境」というものがある。俳境とは、彼が作った言葉であるが、俳句を読んで、それが醸し出す高遠で清雅な世界に浸り、「閑寂自然と禅悦相通じる」ことをいう。周作人は「談俳文」[14] で俳諧に就いて詳しく論じている。日本には昔何種類かの詩歌があったが、残ったのは短歌だけで、それを和歌と呼び、５７５７７計31音からなる詩である。この詩は５７、５７、７の三つの段落に分けるべきであるが、普通は５７５、７７の二つに分け、二人で一つずつ作る。これが連歌の始まりである。短連歌という。長連歌とは18か25、或いは50首の和歌からなり、３人以上で作る。歌会に適している。平安時代の後期に既に連歌が現れ、室町時代には俳諧連歌が盛んになってきた。俳諧とは俳諧連歌の略称である。機知で、諧謔の言葉で即興的に連続して読んでいく。後に、最初の５７５、つまり発句だけでも詩になり、俳句となった。俳句を作る人が書く文章が俳文である。

実際、俳諧という言葉は中国の古典から来ている。「史記滑稽列伝・索隠」に「姚察云、滑稽猶俳諧也」、つまり俳諧は滑稽も同然という件がある。「左伝正義」にも「宋太尉袁淑取古之文章令人笑者次而題之，名曰俳諧集。」とある。杜子美集の中にも「戯作俳諧体遣悶二首」の句が見える。日本の俳文には特色がある。一般の文人が書くのではなく、俳人という人たちが書く。俳人とは俳諧詩人のことであるが、俳句も作れば俳文も書く。観察及び表現の方法が俳諧的なので、そのような修練を積んでいない一般の文人には俳文は書けない。

俳諧文学は幾多の変遷を経ており、俳文の内容もまちまちである。閑寂幽玄のものもあれば、洒脱飄逸のものもある。花鳥風月に楽しむのもあれば、人生の滑稽気味に注目するのもある。総じて、３種類に分けられる。「一つは、高遠で清雅な俳境であり、一つは、諧謔風刺であり、一つは、前の二つの間に介在する、奥が深くて、おどけて奇妙な趣味である。然し、表現の方法はみな簡潔を貴しとし、余韻があるのを好み、枝葉末節を嫌う。文章には一致した傾向があり、巧妙な比喩や適切な故事来歴を多く使い、精錬された筆致と含蓄のある語句で表現し、又

雅俗和漢語を自由に駆使し、乱雑のように見えながらバランスが取れている。故に、俳文は難しい。」

彼は松尾芭蕉や与謝蕪村、正岡子規等の俳句を読んでは、機知・滑稽が高雅・幽遠な伝統的情趣「わび」・「さび」と結合し、見事に洗練・昇華されている。そして又、それが庶民的・日常的・現実的世界に求められている。言葉を換えて言えば、高く心を悟りて、俗に帰るということに感動し、賛美の辞を惜しまなかった。周作人は淡泊な文章が好きで、兼好法師・芭蕉・島崎藤村のこの種の文章を愛読した。彼は島崎藤村の随筆に就いて、思想としては超脱したところがないが、「非常に穏やかで実直、尚且つ澄み切っていて明るく、清い。凡俗離れしていながら、新奇さを感じさせない。正に古人の言うように、読めば疲れを忘れる。」[15]「飄逸、ユーモアであっても、誠実で深奥な思想と経験が滲み出ている。芭蕉から始まって一茶、子規に至るまで一貫している。」[16]

4．浮世絵

川柳を風俗詩と言うならば、浮世絵は風俗画であり、庶民的な絵画である。周作人が浮世絵に出会ったのは宮武外骨が編集している「此花」という雑誌であった。宮武外骨は明治大正時代の言論界の反骨・奇行の人で、定期刊行物や単行本を数多く刊行し、官僚政治や偽道学に反旗を翻し、30何回も発行禁止の目に会ったことがある人物である。その雑誌は活字和綴じ、木版画挿し絵のもので、題材は種々様々で、筆禍史から私刑類纂、賭博史、猥褻風俗史等色々あった。「此花」は浮世絵の研究の専門誌というより、浮世絵を紹介する月刊誌で、２年くらい続けて出し、画集も何種類か出した。周作人が浮世絵の肉筆画、木版画、特に肉筆画より素晴らしい、各色の音楽的調和によって自然に画面に空気の感情を起こしている木版彩色摺りの木版画を見ては、幼少時代に魯迅の影響を受け、中国の切り絵や版画に夢中になった時のことを思い出し、懐かしく感じたに違いない。

周作人は「我的雑学」[17] でこの辺の経緯を詳述している。

小島烏水の浮世絵と風景画は専門書が出ており、歌川広重の「東海道五十三次」、葛飾北斎の「富嶽三十六景」等は世界的にも有名で、復刻版ではあるが、見ているだけでも楽しい。美しい景色を描き出しているだけでなく、カラーの木版画も中国のとは全然違う。彼は本当にその魅力に引き付けられ、興味津々であった。

然し、浮世絵の重要な特色は風景画にあるのではない。「浮世」という言葉自体、元来中世の仏教の無常観と長年に亘って続いた動乱の現実に基づく「憂世」から来ており、近世になって成長し、勢力を持つようになった享楽的な町人が勝手に浮きに浮いて慰むという意味の「浮世」に代えて出来た名前である。故に、浮世絵の本色は市井風俗にあり、それも遊里や芝居町にある。歌舞伎図と役者絵及び遊里風俗図と美人画が２本柱である。美人は自ずと大半遊女になる。浮世絵と言えば、吉原遊廓を連想するように、両者は非常に密接な関係にある。画面は大変華やかで立派であり、色彩も艶やかに美しい。ところが、その中に常に一抹の暗影・陰翳がある。或いは東洋色と言えるかもしれない。中国の芸術や文学、乃至「道」を読んでも同じ

印象を受けるし、浮世絵はもっとはっきりしている。

そして、彼は永井荷風の「江戸芸術論」[18] の次の件を引用するのである。

「余は今自己の何たるかを反省すれば、余はヴエルハアレンの如く白耳義人にあらずして日本人なりき。生れながらにして其の運命と境遇とを異にする東洋人なり。恋愛の至情はいふも更なり、異性に対する凡ての性欲的感覚を以て社会的最大の罪悪となされたる法制を戴くものたり。泣く児と地頭には勝つ可からざる事を教へられたる人間たり。物云へば唇寒きを知る国民たり。ヴエルハアレンを感奮せしめたる生血滴る羊の美肉と芳醇の葡萄酒と逞しき婦女の画も何かはせん。嗚呼余は浮世絵を愛す。苦界十年親の為に身を売りたる遊女が絵姿はわれを泣かしむ。竹格子の窓によりて唯だ茫然と流るゝ水を眺むる芸者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麦売の行灯淋し気に残る川端の夜景はわれを酔はしむ。雨夜の月に啼く時鳥、時雨に散る秋の木の葉、落ち花の風にかすれ行く鐘の音、行き暮るゝ山路の雪、およそ果敢なく頼りなく望みなく、この世は唯だ夢とのみ訳もなく嗟嘆せしめるもの悉くわれには親し、われには懐かし。」

続けて、彼は言う。

「この件を私は恐らく3回以上引用している。われわれは外国人であって、感想は必ずしも永井氏と全く同じとは限らない。然し、同じく東洋人の悲哀を持っている。それで、風俗画として見ると同時に、一種の憂え悲しみの感を常に引き起こす。昔の人が伴奏なしの歌を聞いては嗟嘆の声をもらしたのもこれと同じであろう。」

銭理群はその著「周作人伝」[19] で、この点を次のように評している。

「永井荷風の浮世絵に対する描写はその絵画の世界から見事に日本文化、中国文化乃至東洋の精神を抽出したものである。ここに描き出した人間関係、人間と自然の関係、生命の価値、人生の意義、即ち生きることへの哲学的な思考、寂寞的で、幽玄で、窮迫して悲惨な、夢のように儚く、然し又心の奥底に熱情が流れる心の世界はみな東洋のものである。周作人はそれを纏めて『東洋人の悲哀』と呼んだ。これは正に長い長い尽きることのない歴史と現実の苦難の中をもがきながら生き抜いている東洋人の『時世を憂える』憂患の意識であり、『果敢なく頼りなく望みない』中で追求に執着する現世の精神と忍耐の力である。恐らく周作人がこの『東洋人の悲哀』という表現を思い付いた時はこの上にない、言葉では言い表わせない喜びを感じたであろう。彼の心の中に『日本文化』の全体像が徐々に鮮明に浮き上がってきた。と同時に、又中国文化、東洋文化との融合の中でぼんやりしてきている。この鮮明且つ模糊とした光景を周作人は求めて止まなかったのである。」

周作人の次の指摘も大変重要である。

「日本の平民芸術は優美な形式に切実な悲しみを包み込むのに長けているようである。そこが中国とだいぶ違うところだ。」[20]

今まで見てきたことをここで少し纏めると、日常生活文化を通して、彼が感じた日本人とは、一つは宗教心に富み、一つは諧謔的性格を持ち、一つは心底に悲哀を秘めた国民であるということになる。

5．日本語

周作人は留学当初半年くらい駿河台にある留学生会館に通い、菊地勉という先生について日本語の勉強をやるが、ほとんど下宿にいて、主に英語の本を読んでいた。何しろ対外的な交渉はみな兄の魯迅が一手に引き受けてくれていたので、日本語の切羽詰まった必要性もあまり感じなかった。ところが、日本の女性と結婚し、又兄が帰国してからは否応無しに勉強せざるを得なくなった。でも、環境が環境だけに、覚えるのは早かった。教室での正式の訓練ではないが、家で妻と話したり、小説や新聞を読んだり、講談や落語を聞いたりしているうちに自然に身に付いた。彼が後に述懐しているように、読売と朝日は毎日欠かさず読んでいたし、文学雑誌もぽつぽつ買い込み読むようになった。つまりその日本語の裏には常に社会的な背景が付いており、習得もそれほど難しくなかった。「このようにして習った言葉は、草花のようなものである。たとえ石竹であっても、根の生えた盆栽であり、生け花の大輪のダリアとは違うし、その使い道も多少違う。私が日本語の本を読むのは只単にこの文字を通してその本の知識を手にするためではない。その物事に興味を感じるからで、文字も一緒に賞味の対象になる。時にはその文字も旨味の一部になり、知識と文字を完全に分けることはできない。……私が日本のあれこれと漁るのは多く情趣が目的であるので、自ずとその姿勢は知識を求めるのとは違ってくる。文字は或いはやはり手段であるかもしれないが、その手段に対しても果たしてどんなものか見てみたくなり、使い終わったらすぐ捨ててしまうとは限らない。私は日本語の翻訳の難しさをつくづく感じる。誰でもそうとは限らないが、私個人の経験から言えば、或いは英語より多少多く知っているせいか、日本語は細かいところで言葉の意味と語気をぴったり合わせるのは非常に難しい。」[21] 夏目漱石のものを読んで、「面白かったのは必ずしも内容とは限らなくて、時にはひとえに文章に魅せられて途中でやめるに忍びない気持ちにさせられた。こういうことは夏目の外にはあまりないようである。後輩では志賀直哉にそんな気分があるくらいだが、次は佐藤春夫といったところか。……夏目の文章はとくに初期のものに彼独自の特色が濃厚であって、これを英国紳士のユーモアと江戸っ子の洒脱の和合せるものといってよいのではあるまいか。」[22]

彼はこのようにして、夏目漱石から坂本文泉子・鈴木三重吉・長塚節、森鴎外・石川啄木・与謝野鉄幹晶子夫妻・木下杢太郎・戸川秋骨、永井荷風・谷崎潤一郎、武者小路実篤等というふうに明治大正文学に入って行き、更に近世へと遡り、上代の「古事記」まで行き着き、そこに漂っている牧歌的な美しさ、潤える心情の流露に感激し、人情細やかさは日本国民性の長所であると結論付ける。

「『万葉集』が中国の『詩経』に当るとすれば、『古事記』はさしずめ『史記』ということになりますが、その上巻に見えるような優美な神話を、太史公は書いていません。……紫式部の『源氏物語』五十四巻は十世紀に出来ました。……これは実に唐朝の『紅楼夢』とでもいうべきもので、唐朝文化の豊富さからすれば、かような大作を生んでもよかったのではないかと思われますが、どういうわけかその光栄は藤原女史にさらわれてしまいました。」[23]

「『古事記』神話の学術的価値は疑う余地がないとして、私どものように文芸として読む場

合でも、これはなかなかおもしろい。日本人は本来芸術的な国民であります。その制作の過程には印度中国の影響の跡が多々見受けられるにもかかわらず、なお独特の精彩を保っています。荘厳にして雄渾なる空想にこそ欠けるかも知れないが、優美繊細なところは極東の他民族に真似ができません。また持前の人情味があり、その筆致はつねにある種の潤いを帯びていて、粗雑に乾涸びたものでない、そこが私には最もおもしろく感ぜられるのです。」[24]

要するに、彼は生きた日本語を習い、その醍醐味まで味わうところまで行き、彼の「知」の学問は西洋から、「情」の学問は日本からという思いを遂げることができたのである。

30年代の前半、日中両国の関係はますます悪化し、満州事変、上海第一次・第二次事変、満州国の成立と、事変が後を絶たず、正に風雲急を告げる時代であった。にもかかわらず彼は「日本語について」、「『吾輩は猫である』」、「『和文漢読法』」等の文章を書き、日本語を勉強するよう提唱するのである。

「がんらい日本語と中国語は系統上に何の関係もないが、ただ日本が中国文化を採り入れたついでに漢字をも借りて行き、ずっと今も訓読あるいは音読して実字に当てているまでである。傍訓や虚字の表示は早くから仮名に改められたし、漢字と仮名の割合も文章により一様ではない。……日本文は結局外国語であって、あいだにたくさん漢字がまざってはいるものの、実際にはたいして私どもの足しになるわけでない。」[25]

「結局のところ私は日本語を習うことを主張するのである。まず中国で勉強して、もし資力が許せばそれから日本へ行ってみるのがよい。……言葉や文字はもともと道具なのであるから、初学ないし速成者にとってはとにかく役にさえ立てばよいわけだ。もし研究を掘下げようと思うならば、言葉にはそれなりの生命があることを知り、それに対し何分かの愛着と理解を抱くまでになる必要があろう。そうなるには、根本的に口語から入り、さらに名家の書いた文章をたくさん読んではじめて、本当にわかって来るのであって、規則を何十条か覚え社会科学書に数冊目を通した程度で到達できることではない。そこで次の意見はこうである。日本語を習うには精々悠長に構えて、なるべく多くの時日をかけることが必要で、やむをえぬ場合はともかく、くれぐれも速成を求めるべきでない。」[26]

周作人の日本語学習に関する見解は卓見であり、言語学或いは外国語教育が専門ではないにもかかわらず、どの外国語教育者にも引けを取らない。彼は何時も謙遜して、自分は雑学だと言っているけれども、実は大変な博学なのである。

Ⅳ. 日本の国民性

1.「忠君愛国」

日本と中国、或いは世界のどの国とも違うところと言ったら、その国体である。中国は所謂易姓革命で、血統とは関係なく統治者の姓が変わる。皇帝は天子で、天命を受け、天に代わって国を統治する。その皇帝が不徳になった場合、有徳の者がそれに代わって天命を受け、皇帝になる。つまり、天命が革まるという訳である。革命はきれい事ではなく、事実は力で旧皇帝

を倒し、皇位を奪い、新皇帝となる。辛亥革命にしても、共産党政権にしても同じである。ところが、日本は万世一系で、皇位が古今一貫している。神武天皇から始まって、昭和天皇、そして、百二十五代の平成、今上陛下と続く。2千何百年の間に、平将門や弓削道鏡が皇位に就こうと企てたが、失敗に終わり、天皇家の血統はずっと続いている。天皇は実権を握らず、国を治めてきたのは武内宿禰・蘇我氏・物部氏・藤原氏・源氏・平氏・足利氏・織田信長・豊臣秀吉・徳川というような幕府・将軍である。「日本のことを理解するにはこの一事に注意せざるをえない。日本と中国の思想が少々くいちがう原因はほぼここのところに発している」と、周作人は論文「日本管窺」[27]で指摘し、それが日本の国民心理に与える深くて広い影響を分析している。

第一に国民の国に対する感情である。

日本はユーラシア大陸から離れている島国である上に、日本人は勇悍であるので、異民族に征服されたことがない。「このことは、国民に己れの無傷な国土に対し真の愛情を覚えさせたばかりか、ひいては彼らの性情にまで影響して、征服を受けた民族にくらべ、より剛健質直ならしめもした」。中国は5世紀頃に国の半分を鮮卑族に取られて以来落ち着いたことがなく、その間元と清に2回合計5百年も全国を征服され、更に19世紀半ば頃から百年連続して帝国主義列強に侵略されている。これが中国の国民性に与えた影響も計り知れない。近年日本がいくら杞憂だと言っても、軍国主義の復活の恐れありという被害妄想を中国が抱くのも無理もないことである。

日本人が自国に対して優越感を抱くのは分かるが、これには「郷土の愛と軍国的欲望」の二種類がある。例えば小林一茶が詠んだ

わが国は草も桜も咲にけり

けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ

等は前者の例であるが、30年代中国大陸で横行跋扈している日本軍人や浪人等は後者の例で、彼らの「愛国とは、外と戦うことに限るのが普通らしく、それ以外に国家の名誉などはさほど愛惜せぬ」し、その原因は「日本の官民自身に国家の名誉を愛惜する能力がない」からである。

第二に君に対する感情である。

「天皇は従来虚位を擁するばかりで、何もとりしきってこなかったからこそ、人民は彼に対して好い感情だけを持ち、あらゆる政治上の善悪はすべて幕府の責任ということになる」。「民間にも君民一体の信仰があり、また事実としても歴代本族一姓の元首を戴いてきた。その間におのずとある種の感情が発生した事情は、他の国とかなりちがうところで、それはより真情に近く、かつ非公式的なもの」である。

内藤湖南は日本にはもともと「忠孝」という言葉がなかった、だからそういう思想が古代からあったというのは疑問であると言っているし、周作人も忠君愛国は封建制、軍国時代特有の育成物で、一時的な習慣であり、日本の国民性とは言えないという考えである。日本人の天皇に対する深い感情は明治維新以降の富国強兵時代、特に軍国主義風潮盛んな時は忠君愛国の色を帯びたが、それまで或いは現在はそういうものではない。やはり一つは日本人の宗教信仰の

現れであり、天皇を神々の代表、現人神と思っていたのと、一つは実質的ではないにせよ、政治的統一の中心は皇室・天皇であり、その政治的中心が同時に、民族的中心・社会的中心でもあるということと、更にもう一つは天皇を最高の人と見、自分ではなかなか果たせない夢と希望を天皇に託しているのではないだろうか。理想・抱負・人柄・性格・教養・身のこなし方・言葉遣いに至るまで、全ての面で、天皇は国民の手本であり、ビジョン、理想像なのである。だからこそ、天皇のことを口にする時は敬語を使い、想像できない莫大な税金が皇室に注ぎ込まれていても文句一つ言わないのである。

周作人は同じ論述の中で又次の点を指摘している。

「日本人は単純質直なる国民で、それなりに好い性質があるけれど、狭量で短気なところは欠点である。」

「君臣主従の義から発生した武士道は、日本の名物であって、古来、歴史や文芸に多くの感動的な故事を留めているのは事実だが、今ではすたってしまった。」と言い、1923年の大杉栄夫妻殺害事件、1932年5・15事件の例を挙げ、武士道は「地に落ちた」、「一層あやしくなった」、「地を払った」、「一般世間もまたいまさら武士道など尊重はしていないのだ」と断言する。

2．武士の情

周作人は1935年に連続して発表した日本論シリーズの「日本管窺之三」[28] で新しい文化論を打ち出す。「人類の文化は二つに分けられるのではなかろうか。その一は強いていえば物の文化、その二はこれも強いていえば人の文化だ。およそ生物の本能にもとづき、道具を使い技能を伸ばしなどして生存をかちとろうとするのが、物の文化である。」鉄砲・ミサイル・原爆等は発達した爪牙で、電子顕微鏡・テレビ・電話等は鋭敏な耳目であり、電車・飛行機・宇宙船等は手や足の延長、計算器・コンピューター・パソコン等は頭脳の分身と言えなくもない。日進月歩するこの文化のお陰で、人間の視野・行動範囲は小は分子・原子まで、大は地球・宇宙まで広がり、自然を征服し、豊かな暮らしができ、寿命も大分伸びた。但し、だからと言って、いい面ばかりではない。よく指摘されるように、昨今物質的には豊かになったけれども、精神的には逆に頽廃し、貧しくなった、と悪い面もある。米国の広島・長崎原爆投下は戦争の更なる被害を食い止めはしたものの、何10万という無辜な住民を犠牲にした。今高校生さえ持っている携帯電話など、周りの人に迷惑をかけるだけでなく、そのせいで人間疎外にもなりかねない。人を損じて己れを利するどころか、己れまでもだめにしてしまう。従って、文化としては決して高級とは言えず、低級である。「自然に対して逆らうのではないが、とにかく修改ないし節制を加え、行為は他人を顧慮に入れ、少なくとも己を利して人を損ぜず、あるいは人と己を倶に利しさらには己れを損じて人を利するにも至る、そういうのが高級な、人の文化である。」これは達見であり、現在にも通用する。

この文化論と関連して、彼は「学術芸文はもとより文化の最も高い表れである。ところがより低い部分の方が世間ではよほど勢力を持っていて、数少ない人間の思想がどんなに合理的でも、多数こそは実力なのである。そこで、文化というものについては、文人や学者ばかりを対

象にするのではなくて、もっと範囲を拡げて見なければいかぬらしい。」と言って、武士の方に目を向けるのである。彼は谷崎潤一郎の小説「武州公秘話」を読む。桐生輝勝が牡鹿城に人質になった時目にした首装束の生々しい描写、そしてその後の

「その女たちは、死者に対する尊敬の意を失はないやうに、どんな時でも決して荒々しい扱いをしない。出来るだけ鄭重に、慎ましやかに、しとやかな作法を以て動いているのである。」

のところを読んで感動し、又、自分が学生たちと一緒に読んだ松尾芭蕉の「奥の細道」の、小松の太田神社で、篠原の合戦で戦死した斎藤実盛の遺物の甲と錦の切れを観る一節及び謡曲「実盛」を思い合せて、感無量になる。そして、

「牡鹿城の場合でも篠原の場合でも、死者への敬意を失しまいとするのは、いわば人情の美しさであって、動物の本能にはないところのものだ。……私はかねて、人類の道徳の中で仁恕の位置は忠孝よりはるかに高いものだと思っている。だから日本の武士道の中でも、この『武士の情』を重視し、ここにはすばらしい花を咲かすことのできる大いなる種子が含まれているように感じるのだ。主従の義などはまことにせせこましいもので、たとえば周末游侠の士が知己に感じた場合のように、人さまのために家国を安んじるくらいのことはするだろうが、こちらは菩薩の願行であって、見かけこそささやかでも、拡充すれば天下を安んじ他人を済度するていのものだ。」

と、最大の賛辞を贈り、

「私は日本の武士生活の中の人情を語ってみたかったまでだ。そしてとくにあの陰惨な首実検を例に取り、無残な殺し合いの中になおそこばくの人情の発露のあったことを見たのだが、思うにこれは、この上なく暗い人生の路上にともされた只一点の光明というものではなかろうか。」

と結んでいる。

死者に対する尊敬の意とか、「武士の情」とかいうようなものは同じ東洋人でも、日本独特のもので、中国にはない。「仁恕」という言葉はあっても、ここまで情け深く、人を哀れむところまでは行かない。現代に至り、階級論が浸透してからは、情けなど偽善と言わんがばかりである。魯迅の「痛打落水狗」（力を失った悪人に追い打ちをかける）はまだ理解できるが、毛沢東が発動した中国プロレタリア文化大革命など人格を尊重どころか侮辱も筆舌に尽くし難いほどである。私が上海の復旦大学の第9教員宿舎で目のあたりにしたことを例に挙げておく。一つは化学者の厳という有名な教授が学内で造反派に嬲り殺され、そのままリヤカーに乗せられ、汚いむしろを半分かけただけで、両足丸出しのまま自宅のある当該宿舎まで運び込まれて来た。大学の校門から宿舎までほぼ200メートルの距離であるが、そんな格好で大通りを通って引っ張って来たのである。一つは遺伝学者の談という副学長の夫人が紅衛兵に吊し上げられ、着ている服を剥ぎ取られ、顔から体に墨汁をいっぱいかけられ、両手で裸も同然の胸を隠しながら、裸足で駆け込んで来た。ここまで侮辱されては誰だって生きていられない。況や女性である。翌朝、談教授が宿舎の門番のところに配達の牛乳を取りに行っているほんのちょっとした隙間に、夫人は家で首を吊って自殺してしまった。昔、日本は囚人を移動させる時、深編笠

みたいなものを被ってもらったし、今でも自宅から連行する時は服か何かで顔を隠して連れて行く。中国では絶対そのような気配りなどせず、テレビでも素顔を平気で映し出す。見せしめというところであろうか。

3．裸体

エリスは「聖フランシス其他」の中で次のようなことを書いている。

「ギリシャ人はかつて裸体を喜ばぬということをペルシャ人及びその他の蛮人の特性と見なした。日本人――この、時代と風土を異にするギリシャ人もまた、かの西方の蛮人によって教えられるまでは、裸体を忌避することを考えつきもしなかった。」

周作人は「東京を懐う」でこれを引用して、道学的な偽善と淫佚に由来するところの君子面をする人間が屯する中国を批判する。中国では衣服纏わぬ者は図書館に入ってはいけないとか、女人の素足はご法度とかだけでなく、天足ならぬ纏足がある。共産党政権になってからはさすがに纏足こそ絶滅したものの、芸術品である裸体像の彫刻や絵画は勿論攻撃の標的になり、女性も髪の毛を肩より下まで伸ばしてはいけない、お化粧もだめ、ちょっと可愛らしい服装は禁物、男性と同じ人民服を着るべき等と国民党政権時代より後退した。

日本は中国から文明・文化を導入するようになってから、その「蛮人の特性」の影響も受け、小説に接吻の場面を多く入れてはいけないとか、石像に袴を着けさせよとか、官吏の目が淫佚にして羞恥深くなってきているが、民間ではまだいい方である。浴場の裸体群像は見慣れて平気だし、婦人の素足など当たり前のことである。更に、彼は履物の例を挙げて言う。

「此の履物のうち最も善美なのはギリシャ古代のサンダラ（sandara)、閑適なのは日本の下駄（geta)、経済的なのは中国南方の草鞋だろう。……いずれも、隠さず、飾らず、自然に逆らわず、さりとて実用と美観を損うにも至らぬところが取柄だ。……脚その他の身体の部分については、開けっぴろげな方が束縛し諱み隠すのにまさるとする卑見からして、ギリシャ、日本の良風美俗を中華の及ばぬところと賛美せずにいられないのである。」

日本人は裸体、履物も含めて、自然さ、自然的な美が好きである。そして、又自然を愛す。「日本旅行雑感」[29] で、周作人は芳賀矢一やロシアの詩人Balimont、戴季陶の言葉を借りて言う。

「国民性の長所に挙げる草木を愛し自然を喜ぶ、淡泊瀟洒、纖麗纖巧などは、それぞれ当っている。こういった国民性の背景には、秀麗な山水の景色があり、さまざまの優美な芸術品は国民性の表現にほかならない。いわゆる東方文明のうちで、この美術だけが永久に輝くものであろうと私は思う。」

「『日本人はみな自然に対し一種詩的な崇拝を抱いている。だが同時に理想的なまでに勤勉な人民でもある。彼らは実によくしかも美的に働くのである。ある時私は水田中の農夫の働きぶりを見て、思わず涙ぐんでしまった。彼らの労働と自然に対する態度は、いずれもまったく宗教的であった。』」

「『田舎の農夫だけは素晴らしい。平和なる性格、忠実なる真情、素朴なる習慣、勤倹なる

風俗の何にかけても、中国の農夫と変るところがないのみか、中国の江浙両省の田舎の風習よりよほどまさりかねぬ。』」

日本は島国で、ギリシャはバルカン半島の南端にあるけれど、周りは綺麗な海で、真ん中は山脈が走っている。日本はモンスーン気候で、四季がはっきりしているのに対して、ギリシヤは夏が乾燥していて、冬は逆に湿潤である。小異はあるにしても大同である。両国ともユーラシア大陸の端にあり、裸体にしても、西の端の隠さないから始まって徐々に隠すようになり、真ん中になると、女性は顔までも出してはいけなくなるし、足は長い長い布切れで縛り付ける。そして、東の端に来て、又解放され、裸体を気にしなくなる。こうした事情もあってか、

「日本は小ギリシャといわれるとおり、確かにギリシャに似た特色をもっているが、中国文化との関係では、先進国の文化を持って行って保存あるいは同化のうえ一段と発揚した点において、更にローマをも思わせる。」[30]

「日本の古今の文化が中国と西洋に取材していることは本当だ。しかし一通りの調合を加えてそれを自分のものとしたところは、あたかもローマ文明がギリシャより出て自ら一家を成したのと同じである。（日本の成功はローマ以上かも知れない。）したがって日本に固有の文明があるといっても何ら差支えはなく、それは芸術と生活の面において特に顕著である。ただし、哲学思想と呼べるほどのものは何もないが。」[31]

4．英雄と賢哲

R．ベネディクトはかの名作「菊と刀」[32] で日本の国民性に就いて次のように指摘している。

「刀も菊もともに一幅の絵の部分である。日本人は最高度に、喧嘩ずきであるとともにおとなしく、軍国主義的であるとともに耽美的であり、傲慢であるとともに礼儀正しく、頑固であるとともに順応性があり、従順であるとともにうるさくこずき回されることを憤り、忠実であるとともに不忠実であり、勇敢であるとともに臆病であり、保守的であるとともに新しい生活様式を喜んで歓迎する。彼らは自分の行動を他人がどう思うだろうか、ということをおそろしく気にかける、と同時に他人が自分の不行跡にぜんぜん気づかないときには罪の誘惑にうち負かされる。彼らの兵士は徹底的に訓練されるが、しかしまたなかなか服従しない。」

日本人の二つの相反する側面を完璧に描き出しているが、それよりほぼ10年前に周作人は「日本文化を語る手紙（その二）」[33] で、英雄と賢哲という表現で類似のことを指摘している。

一民族の代表として英雄と賢哲の二種類のものがある。前者は政治軍事方面のもので、後者は芸文学術方面のものである。両者とも人生に於ける活動の一面でありながら、目標や手段が違うため、往々にして背馳する。

「二十年来、中国に向けられた日本の顔は人喰いのそれでありました。かの隋唐時代の文化的交誼は完全に跡を絶ったばかりか、甲午の年の一刀一銃による殺し合いさえ、今では男らしくも鷹揚な、もはや得がたいもののように感ぜられます。今のは、ほとんどみな卑劣な齷齪したやり口ばかりで、武士道どころか、いっそ上海のゴロツキのゆすりに近いというべきです。怨恨はもとより、それ以上に軽蔑にこそ値いしましょう。」

「日本管窺の四」[34] で、彼は引き続きこの「日本民族の矛盾した現象」を糾弾する。「日本人がすぐれて美を愛することは、文学芸術からも衣食住の形式からも等しく見てとれるところだ。しかるに中国に対する行動においては、何故あれほどの醜悪さを示すことができるのか。日本人が器用なことも、工芸や美術によって証明できる。ところが、行動においてはかくも拙劣だ。日本人は清潔好きでその到るところの浴場は他国に例を見ない。けれども行動においてはこれまたかくも汚なく、時には余りの卑劣さに吐気さえ催させる。これは実に天下の一大奇事であって、ほとんど奇蹟といってもよいだろう。」

そして、当時続発した蔵本失踪事件・華北自治事件・抗日テロ事件・密貿易事件・ヘロイン事件等を例に挙げ、言う。

「日本民族は明、浄、直を好むのである。それならこれらの例はその中国に対する行動がすべて暗黒、汚穢、歪曲に満ちていることを証明するに充分であって、つまりは一切が正反対に表れているわけだ。日本人にどれほど美点があるにせよ、それを中国に対しては何一つ示すことができないで、あるのはただ悪意と、情理を逸脱した奇怪さばかり。」

実際、周作人は20年代後半から鋭く日本の中国に対する侵略を批判してきた。

「中日間の外交関係のことはいわぬとしても、それ以外の面で彼らが私どもに与える不愉快な印象もすでに相当なものだ。中国にやって来る日本人の多くは浪人と支那通である。彼らはまるで中国がわかっていない。僅かに旧社会の上っ面を観察し、漢詩の応酬だの、中国流の挨拶だの、麻雀や芸者買いだのをおぼえたばかりで、すっかり中国を知った気になっているが、何のことはない、中国の悪習に染まり、いたずらによからぬ中国人の頭数を殖やしたようなものだ。また別の種類の人間は、中国を日本の領土と心得ている。彼は植民地の主人公として、土民に対し祖先伝来の武士道を発揮すべく乗込んで来たのだ。かくて本国の社会では羽を伸ばすことのできぬ野性の存分な発露と相成る。」[35]

特に、日本人が北京で発行している漢字新聞「順天時報」には猛烈な批判を浴びせた。この新聞は日本軍閥政府の御用新聞であって、聖道の名に隠れて中国侵略を正当化し、帝国主義の眼光で中国人を教化・奴隷化しようとしていると見、批判する。

「日本の漢字新聞がいかに捏造と煽動に長けているといっても、こうまで明らさまなでたらめは珍しかろう。日本人は中国の苦境をよいことに永年内政に干渉し、『騒ぎを挑発し』続けただけでは足りず、もう一歩進んで中国のために礼教の維持、風紀の整頓をはかって、文化侵略にまで乗出した。手段の陰険なことは英国も顔負けである。」[36]

日本の出兵はシベリアから満州・津沽・山東へと止まることを知らないし、反動勢力の扶植にも躍起になっている。彼はそれに対し、声高らかに中国の知識階級に呼び掛けるのである。或いは彼自身の言葉で言うと、鼓吹するのである。

「民衆政治の行なわれない日本、軍人と富豪が政治を牛耳っている日本というものは、所詮中国にとって脅威であり危険であるほかなく、中国は自存のためには積極的に抵抗と排斥の方法を講ぜざるをえない。……日本は毎日『日支共存共栄』を叫びたてているが、実際は侵略の代名詞であって、豚が食われて他人の体内に存することを、すなわち共存共栄という。……

『日本人が我々に共存共栄をもちかけるのは、さあ取って食うぞという意味だから、よほど用心が必要である。日本ではごく少数の文学者、美術家、思想家以外は、ほとんどが皇国主義者であって、彼らは自国の忠臣ではあるかも知れぬが、決して中国の良友ではない。』……日本の有産階級、軍人、実業家、政治家、新聞人、一部の教育家、それと中国にいる浪人や支那通はましていうに及ばず、みな帝国主義者で、中国侵略を職務としている……私どもは彼らに何を挑もうとするのでもないが、ただ日本が中国の最も危険な敵であることは、はっきりしていなければならぬ。これが、中国の知識階級、とくに日本につき多少なりとも理解をもつ者の目下中国にあってなすべき仕事であり、尽すべき責任である。」[37]

兎に角、「英雄は大体において善人でないが、それにしても悪事をなす能力をもっていて、世界をゆさぶり、人類を苦しめ、歴史を変えるほどのことをやってのけられる」が、「もしもこの民族の代表を見出して、彼らの悲喜苦楽をたずねたいと思うなら、やはり横町だの借家だのを訪れなければならない。」

周作人は賢哲を高く評価し、浮世絵師を例に挙げ、言うのである。

「浮世絵の作り手は絵師、彫師、摺師の三者で、当時はたしかに虫けら同然の平民でありました。しかし今は彼らを聖明なる徳川家の英雄に対立するところの賢哲の部類に含めぬわけにはゆきません。」

5．反動

周作人は1919年の4月と7月2回東京に行き、帰国直後「日本旅行雑感」を発表しているが、彼は日本の政治や経済をよく見ている。物価は7、8年前に比べ、3倍くらい上がっているが、収入は全然追い付かない。平民或いは無産階級の生活はますます苦しくなってきている。ところが、その反面成金が増え、奢侈の風が盛んになった。華族・貴族・富豪・官吏・紳士と平民の間の「階級の衝突」が深刻化し、労働者のサボタージュ・ストライキが頻発している。「成金という言葉には軽蔑と憎悪がふんだんに含まれている。宿で自動車のブーブーと音を出しながら突走るのが聞えるたびに、近所の子供はその真似をして、『korosuzo ！ korosuzo ！』（殺すぞ！殺すぞ！）とはやし立てた。自動車の音がそういっているというのである。」彼は、はっきりと「新聞記者、官僚、学者、政治家、軍閥」は「理論上ならびに実行上の侵略者」で、「平民」は「被侵略者」と見ている。「彼らのうちの小商人や職人や労働者は大抵は身の程わきまえた人々である。農夫などはとくに平和を愛し、豊作さえ望めれば満足なので、そのうえ全中国全シベリアの土地のことまで考えたりはしない。」ただその中の浪人だけは「小軍閥」で、憎むに足りる。浪人の思想は通俗な侵略主義である。「日本人のうち侵略者を除けば、あとはこの種の人間だけがはなはだ厭うべく排斥すべきものだと、私は思う。」

1920年に書いた「排日の悪化」[38] でも、「日本が中国人の悪い性質をよく心得ていて、それにふさわしいやり方で片を付けようとする……そんなことをするのは日本の一部の軍国主義者だ……我々は、自国の掠奪階級の連中に反対するのと同じように彼らに反対する」と明言しているし、1930年代後半のかの日本論シリーズ及びその他の論文でも、右派・国粋主義・ファッショ

の台頭を指摘している。

要するに、日本の「奇怪な対華行動」や頻発している「事件」、「政治的衝突」は中国に対する侵略であり、「醜悪愚劣」極まりなく、手段が「乱暴なうえにはなはだ見下げ果てたていのものである」。

これは「疑いもなく一個の反動的な局面である。分析するとその成分は二つあって、その一は反中国文化、すなわち大化改新への反動、その二は反西洋文化、すなわち明治維新への反動、となる。私どもは日本文化を推重し、それに独自の地位と価値を認めるものであるが、しかしそれが中国と西洋の文化を根本としていることも事実である。わけても漢文化の影響は甚大であって、けだし年代が久しいだけ深く、かつ広く及んでいるわけだ。」漢字、毛筆、箸から体制、制度まで、例を挙げたら切りがない。ところが、肝心の中国が衰退し始め、政治・経済・社会・文化全般に亘って弱体化し、遂に欧米帝国主義列強の半植民地になり、国土は支離滅裂、各国の縄張りだらけに陥ってしまった。日本にとってその漢文化は重荷になり、その「圧迫は重苦しく」なった。漢文化の影響はプラスの面だけでなく、マイナスの面もある。日本が「『礼教』の国となり家庭や社会に禍根を残した」。脱亜入欧せねばと奮起し、尊皇攘夷、直ちに方針転換し、西洋文化を借用することにより、明治維新に成功し、近代化を実現した。明治政府は富国強兵政策を採り、日清戦争で中国を負かした。日露戦争で列強にも勝てるという自信を持つに至った。反漢文化が絶頂に達すると同時に、反西洋文化も台頭し始め、右派勢力が増長しつつある。「明治の維新は日本にとって一利一害というものであった。利はおかげで戦さに勝ち強国にのしあがったことだが、一方でこの強国の教育が間違った思想を養成して何かと傍迷惑の種になり、自身にも害をなしているのである。……維新以来は諸事ドイツを模範として、あのような『強権』の国となり、国の内外にまた別種のさまざまな禍根を植えつけることになった。今や師匠格――中国とドイツ――の二人とも倒れてしまい、訓諭式の『文治派』も鉄血流の『武力派』も、現時代においては立脚地を失うに至った。そこで日本はどうするのだろう。」[39] というふうに、周作人は中国文化及び西洋文化に対する反動で説明するわけであるが、そのいわば「反動論」の正否は別として、事態は日本の破滅へと進み、日中戦争並びに第2次世界大戦の終焉を迎えるのである。

V．中国の手本

中国人も日本人もみな黄色の蒙古人種であり、同じアジア人である。中国と日本の盛衰禍福は異なるし、お互いの関係も一定ではない。千年もの間、日本は中国を手本にし、巧みに取捨選択しながら、中国文明・文化を導入し、発展して来た。最近の百年、中国の影響から必死になって抜け出し、近代化を遂げ、強国になり、中国を遥かに追い越した。恩を仇で返すわけではないが、矛先をかつての師である中国に向け、侵略を始めた。というような経緯があるにせよ、中国と日本は、と言って、周作人は「東京を懐う」で次のように指摘する。

「中国と日本は今でこそ敵国同士の立場にあるものの、目前の関係を離れて永久的な性質を

問うならば、双方とも生れつき西洋とは運命も環境もはるかに異なる東洋人である。日本のファシズム中毒患者たちが自国民の幸福が西洋にまさるかあるいは少なくとも同等だと思い、まだアジアを併呑しえてない点だけを引け目に感じているその一方で、芸術家は『物いへば唇寒き』悲哀を感じている。これこそは東洋人の悲哀というものである。」

舒蕪は周作人のこの「東洋人の悲哀」は消極的なものと酷評して言う。[40]

「周作人はその小品文で実際『苦界十年親の為に身を売りたる遊女が絵姿』の類い等描き出していない。彼が描き出そうとしている美は、やはり彼が何時も言っているような『草木虫魚』の美である。これは言うまでもなく只単に草木虫魚の四種類だけを指しているのではない。凡そ平凡で、小さくて、質朴で、身近なものはみな彼が描き出す美の原材料になる。それらのものの共通しているところはつまり精練された頽廃或いは頽廃的な精練さなのである。その精練さに廉価なセンチメンタリズムなどは遠く及ばないものの、頽廃だけは一脈相通ずるものである。」

周作人の美意識、そして自分の作品で表現している美がどんなものかは別として、彼が永井荷風の美意識及び美の表現に共感し、中国人も日本人も同じ東洋人としての悲哀を持つと感じたのには違いない。

周作人は5年くらいしか日本に留学しなかったけれども、日本との係わりは深い。誰でもそうであるように、新社会への傾倒と東洋民族の感情的連係から、日本に好感を抱くようになり、好きになる。

「日本に関して、私はギリシャの場合と同じくこれといった研究をしていないが、そのあらゆるものが好きなのだ。戯作文学、俗曲、浮世絵、陶銅漆器、四畳半の書斎、小袖に駒下駄——飲食ですら、私は必ずしも中国料理を世界一とする説に加担しないのだが、日本に似た生魚や清湯は好きである。いかさま私は日本のどこにでも安住できるし、その安閑さたる、決して中国にひけをとらぬと思っている。」

ちょっと脱線するが、この話をしてから39年経った1964年3月に彼は「八十自嘲詩」[41]を書いている。その中に「劇憐獨脚思山父、幻作青氈羨野狸。」という句があるが、ここの「山父」とは目一つ足一本しかなく、人間の心が読める動物で、日本民俗学に出てくるものである。ここからも彼が如何に日本に詳しく、印象も強烈で、亡くなる寸前まで忘れなかったということが分かる。

日本を知るにつれ、情意が生じ、愛するようになり、友になる。つまり親日派になる。もう少し正確に言えば、親日派とは日本国民の真の光栄を理解する者である。ところが、中国にはそういう親日派はいなかった。

「日本の友人よ、私は君に詫びなければならない。私どもは幾千年も君の隣人でありながら、君の真の知己というに足りるただの一人をも数えることができないのだ。」[42]

それで、彼は大声を上げて日本に学ぶべきと叫ぶのである。

「中国には、その独特な地位からして、特に日本を理解する必要と可能性がある。だが事実はさにあらず、みな日本文化を軽蔑し、昔は中国を、今は西洋を模倣しているだけで一見の値

打もない、くらいに心得ている。」[43]「日本を理解しようとせぬ中国人の、日本文化は研究に値しないとか、日本語などは三月もあれば熟達できるとかいう、浅薄な誤まった意見は是非改める必要があろう。」[44]「数十年来、日本に留学した者は少なくなかったが、大抵学んだのは日本が西洋より受容れたものであって、日本自身のものでなく、日本の歴史地理文学美術宗教等、真の日本の精神文明は、従来これを尋ねる者がなかった。それ故日本は今もって一個の謎に近く、したがって中国の日本に対する毀誉はことごとく的をはずれている。」[45]

中国自国の歴史、文化、美術を研究する場合でも日本の研究をしないと結局はできないし、近現代になってから中国がやってきたことはみな日本が一足先にやったことである。新文学一つ取り上げてみても分かるように、日本の言文一致、翻訳調、新体詩、文芸思潮の流派、小説と通俗小説、新旧劇の混合と断絶、様々な過去の史蹟等など、みな中国文学界の喫緊の問題である。「日本が代りにやってくれた古代文化の保存や新文化の実験は、充分私どもの利用に値するのだ。」[46]

この指摘と提言は当時に限らず、現在でも、文化だけでなく、政治・経済・社会全般に亘って有効なのである。

周作人は1925年、五・三〇運動を契機に起こった反帝国主義運動の真っ只中に、「国家間の旧怨を理由に日本文化を軽蔑するのはもとより不当だとして、一方その芸術を耽賞する余りに他の無礼なる言動に目をつむってしまうわけにもいかない」[47] と警鐘を鳴らし、1936年日中両国の関係が更に悪化し、戦争が一触即発の状態にあっても、「日本の文明を愛するの余り、何もかも素晴しいと思い込み、その醜悪面に目をつむるのも、また暴力を憎むからといって逆にすべてを打倒してしまい、日本に文化無しと決めつけるのも、同じように誤りです」[48] と冷静に指摘していることは、彼が如何に炯眼であるかを物語っている。

「日本に学ぼう！」と、ここまで諄々とその必要性を説き、声高らかに呼び掛けた中国人は周作人の他にいない。

これは奈良大学平成13年度科学研究助成によるものの一部である。

註

1）村上菊一郎等訳、世界教養全集　7　秋の日本等、平凡社、1961年11月。
2）同1）、363ページ。
3）張菊香、張鉄栄編、周作人研究資料　上、天津人民出版社、1986年11月、18ページ。
4）木山英雄訳、周作人日本文化を語る、筑摩書房、1973年5月、191ページ。
5）同4）、20ページ。
6）同4）、62ページ。
7）同4）、271ページ。
8）同4）、89ページ。
9）久米旺生訳、論語、徳間書店、1994年4月、117ページ。
10）同4）、98ページ。
11）同4）、87ページ。
12）同4）、253ページ。

13) 周作人、談竜集、実用書局、1972年1月、199ページ。
14) 周作人、薬味集、新民印書館、民国31年3月、189ページ。
15) 周作人、立春以前、実用書局、1973年5月、74ページ。
16) 周作人、苦竹雑記、実用書局、1972年1月、4ページ。
17) 周作人、苦口甘口、実用書局、1973年11月、54ページ。
18) 永井壮吉、荷風全集第十四巻、岩波書店、昭和38年6月、11ページ。
19) 銭理群、周作人伝、北京十月文芸出版社、1990年9月、149ページ。
20) 同4)、74ページ。
21) 同17)、88ページ。
22) 同4)、211ページ。
23) 同4)、49ページ。
24) 同4)、137ページ。
25) 同4)、220ページ。
26) 同4)、218ページ。
27) 同4)、6ページ。
28) 同4)、34ページ。
29) 同4)、101ページ。
30) 同16)、307ページ。同4)、216ページ。
31) 同4)、120ページ。
32) 同1)、357ページ。
33) 同4)、56ページ。
34) 同4)、75ページ。
35) 同31)。
36) 同4)、175ページ。
37) 同4)、176ページ。
38) 同4)、112ページ。
39) 同29)。
40) 舒蕪、周作人的是非功過　増訂本、遼寧教育出版社、2000年9月、62ページ。
41) 倪墨炎、中国的叛徒与隠士周作人、上海文芸出版社、1990年7月、469ページ。
42) 同4)、150ページ。
43) 同35)。
44) 同4)、130ページ。
45) 同4)、147ページ。
46) 同4)、122ページ。
47) 同43)。
48) 同4)、57ページ。

摘要

周作人與其兄魯迅一起同是在中國新文學史、新文化運動史上留下最輝煌的業績的文學家、思想家。他留日五年、之后也終生與日本來往、對日本予以極大的關注。

他喜愛日本的衣食住行、深感日本人清廉質樸、熱愛自然與美。文學藝術雖是文化的最高表現形式、但要知道國民性必須要看大多數平民百姓的生活文化和民俗。于是、他集中精力去研究和體驗日本的祭祀、笑話、諷刺詩、狂言、風俗畫及日語。認定日本人富于宗教心、幽默風趣、與其同時内心具有悲哀之心理。這是亞洲人共有的所謂東方人的悲哀。

其時正値中日關系處于險悪状態、他一面遣責日本軍閥政府的侵略勾當、一面又給与協助、

結果成為中國的漢奸。但他仍繼續研究日本的文化、分析忠君愛國的實質、武士之情上表露出的人情味、所謂的裸體、英雄和賢哲的對立等、指出日本的軍國主義化是對大化改新、明治維新的反動。

日本文化與中國文化的關系恰似羅馬與希臘的關系、日本不僅創造了獨特的文化、還超過了中國。他高呼為了古代的研究、也為了創建新社會、中國必須要向日本學習。